

インタビュー 「人間は生きものであり、自然の中にある」を基本に科学と向き合う

生命誌研究者の中村桂子さんは生きもの多様性や歴史を研究する「生命誌」を提唱してきました。

そんな中村さんの活動がこのほどドキュメンタリー映画になりました。 JT 生命誌館館長 中村桂子さん

若い頃、「生命科学」の研究所で DNA を扱い、うちに帰ってきて、鰯を焼いて、子供に食べさせるという生活をしている中で、疑問がわいてきました。鰯も子供も生きもの、DNA 研究で対象にしているのも生きものなのに、鰯や子供を DNA で考えてもしかたがありません。科学と日常がつながってないのが辛かったですね。でも科学は捨てたくはないと、10 年以上考えた末に思い浮かんだのが「生命誌研究館」という 6 文字だったのです。

5 年ほどかけて 93 年に JT 生命誌研究館が実現しました。若い仲間と一緒にコツコツやってきましたが、20 周年で「ああ、私はこれをやりたかったのだ」とやっと思えるようになり、周りにもそれを認めていただけたと感じています。研究館にはたくさんの方が訪れてくださいます。先日インドの方が「生命誌は僕の考えていたことと同じだ」と。

3・11 東日本大震災はとてもショックでした。「自然ってなんと大きな力を持っているのだろう」と実感したこと、もしあそこに現代科学技術の原子力発電所がなかったら、もう今頃はとっくに復興しているはずなのに、とんでもないことが起こってしまった。それが科学者としては本当にショックでした。「どうしたらいいのだろう」と悩み抜きました。「長い間『人間は生きもので、自然の中にある』という考えを基本に仕事をしてきたのだから、それを考え続けよう」。これが悩んだ末に出した答えです。

科学者が普通の人間であるということをおぼろげに忘れたからあんなことが起きたのだと思い『科学者が人間であること』(岩波新書)という本を書きました。本当に素直な気持ちです。怠け者なので頼まれて書くことが多いのですが、これは自分から読んでいただきたいと思って書いた本です。

原発事故はとても不幸な出来事でしたが、経済優先できた社会が少し変わるかもしれないという淡い期待を持ちました。しかし、残念ながら答えは「No」でした。その表れが東京へのオリンピック誘致です。もしやるなら仙台でしょう。それまでに皆さんを呼べる街にすることです。東京オリンピックは、3・11 を反省してもう一度日本を再生しよう、見直そうとしていない。それで「ああ元に戻ってしまったのだ」とがっかりしました。いまだに自宅に帰れない方がたくさんいらっしゃる。

そんな中でも希望があるとすれば若者、子ども達の存在でしょうか。

『水と風といきものと～中村桂子・生命誌を紡ぐ』という映画が公開されています。ドキュメンタリー映画の藤原道夫監督が私の日常の活動を撮ってくださいました。これをご覧になった作家の高村薫さんが素敵なコメントを書いてくださいました(左記映画コーナー参照)。私がやりたいことをわかってくださっている、このコメントは今の私の宝物です。



《生命誌絵巻》 扇の要は生命体誕生の 38 億年前。以来多様な生物が生まれていった生物の歴史物語が読み取れる

映画 『水と風と生きものと ～中村桂子生命誌を紡ぐ～』

大阪、東京、そして東北へ 自然に眼を向け、大切なことを忘れずに暮らしている人々と語り合い、東北では宮沢賢治の生命観に思いを寄せます。

生命誌研究館を訪ねるたびに、これと似た空間は世界のどこを探してもないと感じる。生命科学が「生命誌」へとつながったように研究館ではその最先端の研究と私たちの驚きや感動がつながり、ともに 38 億年の時間に連なっている実感へと誘われる。(高村薫)

大阪・第七芸術劇場 (06・6302・2073) 11 月 28 日～神戸・アートビレッジセンター (078・512・5500) 12 月 19 日～(火休) 京都・立誠シネマ (080・3770・0818) 11 月 28 日～

★公式ホームページ <http://tsumugu.brh.co.jp>

お知らせ NPO 法人想像文化研究組織・甲南大学共催

「映画上映と中村桂子さんトークの会」

2016 年 3 月 15 日 14 時～甲南大学甲友会館

映画 『水と風と生きものと

～中村桂子生命誌を紡ぐ～』 映画上映後、

中村さんと会場の皆さんとのトークの時間もあります